

3つの視点から考える ハンセン病問題

日時：2025年2月24日（月）
10:00～11:30

場所：港区男女平等参画センター

- ・ コロナウイルスが流行している現代だからこそ学ぶ意義がある「ハンセン病」
- ・ 当事者からのリアルな声を聞いて学ぶ「ハンセン病」
- ・ 高校生の視点から考える「ハンセン病」

特別講演者

筑波大学 人文社会系助教 秋山肇 氏

国際基督教大学（ICU）で、学士（教養）、修士（平和研究）、博士（学術）を取得。日本学術振興会特別研究員、ローザンヌ大学客員研究員、立命館大学国際関係学部嘱託講師を経て、2020年より現職。研究分野の1つとして、新型コロナウイルス感染症に関連する社会的・法的問題を展開する。主な編著書は『ポスト・コロナ学——パンデミックと社会の変化・連続性、そして未来』（明石書店、2022年）。2022年度、2024年度筑波大学BEST FACULTY MEMBER。



講演テーマ：「感染症」・人権と社会

COVID-19は社会に大きな影響を与えました。感染症のリスクを認識した私たちは、今後の社会をどのように考えればいいのでしょうか。COVID-19や感染症と、ハンセン病にはどのような接点があるのでしょうか。COVID-19やハンセン病に言及しつつ、感染症や科学と人権、社会の関係について考える機会にしたいと思います。

ハンセン病回復者のご家族 原告番号75番

昭和24年九州生まれ。1歳で母が、10歳で兄が、それぞれハンセン病にかかって療養所に収容され、自身も「未感染児童」として鹿児島県内の療養所の保育施設に入った経験をもつ。幼少期から近所の人や親族から差別されるも、その理由が分からず、大人になってから「家族がハンセン病だったことが原因だ」ということを知った。2016年に提訴されたハンセン病家族訴訟の原告団に加わり、原告団561人の中から選ばれて裁判所の法廷で自身の経験を語った29人の中の一人となった。現在は関東在住で、偏見や差別が家族に及ぶことを避けるため名前や顔は出せないものの、学校での講演活動等に精力的に取り組む数少ない原告の一人。

主催・進行：河野未悠（高校生）

本講演会をBumb 東京スポーツ文化館の高校生世代チャレンジアシスタントプログラムから助成を受け、主催・進行。高校生の視点から、ハンセン病問題に興味を持ったきっかけや学んできたことを共有します。若い世代にも分かりやすく理解を深めていただけるよう、基本的な解説を交えながらゲスト講演をサポートします。

- ・ 場所：港区男女平等参画センター 学習室C
（〒105-0023 東京都港区芝浦1丁目16-1 みなとパーク芝浦 2階）
- ・ 日時：2025年2月24日 10:00～11:30（9:45開場）
- ・ 参加費：無料（事前予約が必要です）
- ・ 申し込み方法：QRコードからの申し込み



一申し込みフォームはこちらから
（申し込み締め切り：2月23日 15時）